

## 博士（文学）学位請求論文審査報告要旨 古屋昭弘「張自烈『正字通』研究」

張自烈著・廖文英刊の『正字通』（康熙十年、1671年）は『康熙字典』（1716年）の藍本のひとつとして、明代万暦年間刊（1615年頃）の梅膺祚『字彙』と並び称される大型字書である。康熙年間に集中的に翻刻されたとはいえ、清の学者たちの『正字通』に対する評価は低く、現代に至るまでそれ自体が研究対象となることは稀であった。

本論文は、『正字通』の音注に江西贛方言地区の一方音（おそらく読書音）が体系的に反映することを初めて指摘した古屋氏が、この字書の音韻的側面と作者について研究した成果である。

本論文第1部は歴史・版本篇である。第1章では、明末の党社「復社」の巨頭として名を馳せた張自烈の生涯を詳細に辿りつつ、『正字通』の成書過程を明らかにする。張自烈の故郷が（江西の南昌などの説もあったが）確実に宜春であること、清初順治年間、張が南京で『正字通』を増訂するに際して友人方以智との間に学問的交流があったこと、張と廖文英の長年にわたる交流および晩年の張と廖一家の白鹿洞書院での交流から見て「廖文英が張自烈の著作を我が物にして出版した」という定説は再考すべきであること、『正字通』の幾つかの版本に見られる満洲語の字母表の編者廖綸璣が廖文英の子であったこと等は、すべて古屋氏が明らかにしたことである。また、第5章で多くの資料を駆使して作成された張自烈の年譜は伝記研究として緻密なものであり、生涯のほぼ全貌が明らかとなった。

第2章～第4章は版本の問題を論じたもの。『正字通』の多くの版本の系統関係が明瞭に整理され、白鹿洞書院蔵板初刻本（白鹿内閣本）と同修訂本（白鹿東大本）との間に音注の面だけでも多くの違いがあることを発見した。また、方以智の文を資料として、『正字通』の前身である『字彙辯』が崇禎末年にはほぼ完成していたこと、この『字彙辯』の初期の段階を伝えるものが『正字通』よりあとに出版された『増補字彙』であること、個別の字の改定において満洲族による支配が影を落としていること、修訂本を直接受け継ぐ劉炳補修本の成立過程に三藩の乱が大きく関わっていること、平南王尚可喜が廖文英の故郷広東連州に派遣した將軍（総兵）劉炳に、『正字通』の本当の作者が張自烈であることを告げたのが、明の遺臣金堡であったことなども考証している。

『正字通』の作者については、未だに張自烈作者説を否定する説も存在するが、本論文における伝記考証と版本考証によって、その問題は完全に決着がついたといえる。

本論文第2部は音韻篇である。『正字通』の音韻上の最大の特徴は、反切帰字の平仄に関わらず、『字彙』の多くの全濁反切上字を次清字に、また多くの次清反切上字を全濁字に換えたことである。その結果、「譬＝備」「勸＝倦」（いずれも左が次清、右が全濁）のような、客家方言（広東・江西・福建・四川などの諸省の一部地域）や贛方言（江西省の多くの地域および湖南省の一部）およびその他ごく少数の方言に特有な同音化が起こっている。また韻母の面でも、臻深梗曾四摂の合流や山咸二摂の合流（例えば「姻＝音＝英＝鷹」や「壇＝談」）など、摂を越えた韻母の合流が多く見られる。声調の面では陰平声・

陽平声が分化し、上声・去声・入声では陰陽の区別がないことが立証されている。これらの特徴を同時に持つ地点を現代方言の中から探してみると、数少ない地点の中に張自烈の故郷宜春が入ってくるのとこと、これはやはり偶然とは考えられず、『正字通』の音注が反映するのは作者張自烈の方言音（おそらく読書音）である可能性が高いと判断している。

本論文第2部では、まず第1章で音注の特徴と17世紀の江西方言音との関連を考え、次に第2章で内閣文庫蔵白鹿書院本にこそ張自烈の音注の本来の姿が見られることを、他の版本の音注との対照を通して考証、第3章では張自烈が『字彙』の反切を改造あるいは継承するに当たって細心の注意を払っていたことを論じたのち、白鹿内閣本の音注に基づき反切系聯法を適用して声母・韻母及び声調各々の区別を帰納し、現代贛方言その他の材料を用い音価を再構して、張自烈の字音に反映した音韻体系の全体像を明らかにした。これは17世紀の宜春方言の音韻体系そのものではなく、宜春方言音と一定の関連をもつ読書音の体系であろうと述べ、当時の官話音との関連にも言及している。第4章ではその音韻体系に個々の音注を当てはめて同音字表を作成した。第5章は『正字通』表面上やや複雑な様相を見せる全濁上声字の音注を論じ、基本的には全濁上声の去声への合流がそこに反映することを論証する。巻末には本論文全体に関する詳細な書誌と反切対照表が配置されている。

以上のとおり、本論文は張自烈と『正字通』に関する文献学的・音韻史的研究として周到かつ精密な考証と分析を加え、中国近世の字書史並びに音韻史研究に多くの新見をもたらした労作である。本論文で明らかにされた張自烈の履歴及び交遊からは明末・清初の中国南方における知識人社会の様相が浮彫りとなり、この点で歴史学的にも興味ふかい。音韻史の面では、官話以外の一つの特定地域における読書音の体系全体を明らかにしたものとして、とくに大きな意義を有する。

本論文は考証面ではほぼ完璧といってよい。字書の中核を為す字形・字義記述の特質に関する研究が含まれない点から言えば表題はやや適切を欠くこと、音価再構の方法並びにその過程に関する合理的説明にやや不十分な箇所があることなど若干の問題点があり、また『増補字彙』の版本史上の位置づけや贛方言の読書音と南方官話の親近性について、今後さらなる考察を要すると考えられるが、全体として本論文が上述のごとく学術的価値の高いものであることに疑いはない。よって本論文は博士（文学）早稲田大学の学位を授与される価値を十分に有すると判断する。

2007年1月13日

主任審査委員	早稲田大学教授	岡崎 由美
	早稲田大学教授	柳澤 明
	前早稲田大学特任教授・東京大学名誉教授	平山 久雄
	創価大学教授 博士（文学）早稲田大学	水谷 誠